

佳作

異国で感じた友達からの優しさ

東京都東京学芸大学附属国際中等教育学校一年 魚山 果穂奈

「来年の四月からイギリスに転勤することが決まった。」

私が小学校六年生の時、父は突然その言葉を発した。その時の私はなぜだか涙が溢れて止まらなかった。もちろん、それまでの私は家族旅行で海外へ行った経験は何度かあったが仲の良い友達と離れ、しかも外国で生活を送ることなど予想もしていなかった。また、当時は中学受験に向けて一生懸命、塾に通って勉強していたので、これまで苦しんだ経験は一体なんのためだったのかという思いもあった。しかし、時間は止まってはくれず、すぐに日本を経つ日が来てしまった。

渡英してから約一年間、私は現地にある日本人学校に通っていた。イギリスの生活にもやっと馴れ始め、生活に余裕が出てきたときだった。実際に現地校に通っている友達からその様子を聞いて、私も通ってみたいと思うようになった。

現地校に通う決心を父に伝え、転校初日を迎えること

してくれる初めての現地の友達ができてとても嬉しかった。学校に通い始めた当初は英語もその他の教科も全くと言ってもいいほど理解することができなかったが、友達に恵まれたおかげで、すぐにある程度まで理解できるようになった。

なお、私がイギリスに滞在中、数多くのテロ事件が発生した。その殆どがイスラム過激派組織による犯行であった。地方都市のコンサート会場から始まったテロはロンドン中心部の観光地にも広がり、日本大使館からも外出を控えるよう警告を受けるほどであった。そして、イギリスのテロ警戒レベルが最高レベルに引き上げられたことにより、私が通う学校内でも銃を持った軍隊が警備につくなど非常に緊迫した状況に陥った。

さらに、イギリス国内ではテロの影響からイスラム系住民に対する嫌がらせが相次ぎ、特にイスラム教徒の女性にとって伝統的なスタイルであるヒジャブ(布)を頭に被って外出する人々が、いわれのないいじめに遭うことが多くなり、社会問題となった。私の学校でもイスラム系住民が多く、ヒジャブを被った何人かの友達が被害にあい、とても悲しそうにしている姿が目には焼き付いている。もし、私が日本人であるからという理由でそのような目にあつたらと思うと心が引き裂かれそうになった。そして、日本への帰国が決まり、最後の学校の日となった。その日は朝から沢山の人に別れの挨拶をしてもら

になった。当日は母に連れられ、重い足取りで学校へと向かった。自分で決心したこととは言え、十分な英語力がなかった私は、クラスメイトからいじめられるのではないかと、一人ぼっちになってしまふのではないかと不安でいっぱいだったからである。学校に着くと、私の担任である先生が、私たちが待機しているオフィスまで迎えに来てくれた。そして、様々な手続きが終了し、ついに母との別れの時間が来た。その時は、本当の気持ちを隠すために笑顔で別れの挨拶を交わしたが、心の中は一緒に家へ帰りたいという思いと、この学校で頑張らなければならぬという思いが入り混じっていた。その後、その先生に連れられて一時間目の教室へと向かった。教室へ入るとすでに授業が始まっていて、一斉に教室の視線が私に集中した。しかし、それは一瞬の出来事であり、すぐに授業が再開した。授業後、私の席の周りにぞろぞろと人が集まってきた。いじめられるのではないかと思つた私は思わず下を向いてしまった。

突然、

「What is your name?」

という私にも分かる英語が聞こえ、上を見上げると、満面の笑みで生徒たちが私を見ていた。名前を答え、日本から来たことを片言で伝えると、たくさんさんの質問攻めにあった。上手く自分の思っていることを表現することはできなかったが、私の拙い英語を聞き取って話を一緒に

つた。さらに、一番仲の良かったイスラム系の友達とは「絶対にまた会おう」と約束を交わし、私のために涙も流してくれた。その友達とは帰国してから二年ほど経つた今でも、連絡を取り合っている仲である。あれほどまで、緊張と不安で押しつぶされそうだった学校への道は、いつのまにかたくさんさんの温かい気持ち、そして楽しい思い出でいっぱいになっていった。

近年、日本でも多くの在日外国人が存在している。そして彼らは馴れない日本の生活に苦労していることだろう。言語も環境も全く違う場面で生活することは実際に体験した人にしか分からない大変さがある。

「外国人に対して優しく接する」

とても難しいことに聞こえると思うが、私は決してそうは思わない。相手のことを思い合う、基本的なことだから心がけていくことが大切ではないだろうか。そして、私自身も、以前に友達が自分にくれたような「優しさ」の心を忘れず、その気持ちで他人、特に外国人に対して接することができるよう日々の生活を送っていき

たい。